

---

# 守り手の戦い

雨霧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

守り手の戦い

### 【Nコード】

N6905Z

### 【作者名】

雨霧

### 【あらすじ】

数多く存在する異世界を侵略者から守る勢力の一つ神宮寺家。その神宮寺家が何者かに襲われ次期当主である神羅しんらは一人ある異世界へと逃がされる。家族と仲間を失った悲しみにくじけそうになる神羅だったが一族の使命を果たすべく立ち上がる！

## プロローグ（前書き）

はじめまして、雨霧といえます。

処女作ですので未熟な点が多いと思いますが、楽しんでいただけたら幸いです。

## プロローグ

燃えていた。

純和風の屋敷からは黒煙が凄まじい勢いで立ち上がり、空を黒く染め上げていた。火はとどまることを知らずいつ止まるのか予想もできないほどであった。

そんな屋敷の中を三人の人影が走っていた。

「急げ…！もうすぐだ！」

三人の中の一人、鍛え上げられ引き締まった体つきの男性が言った。普段の落ち着いた感じは無く瞳には焦りが見て取れた。

「神羅<sup>しんら</sup>、ちゃんと付いてきてますね？」

「はい、母上」

続いて言葉を発したのは先ほどの男性と同じ年頃の、優しい感じのする顔つきの女性だ。こちらも同様に顔には焦りが見て取れた。そして女性に神羅と呼ばれたのはありふれた日本人の特徴と同じ黒髪、黒目に整った顔立ちの少年だった。身長は175センチほどあり、一見すると細く頼りなく見えるが細く見えるのは極限まで体を鍛えしぼりあげているからであって見た目とは裏腹に力強さにあふれていた。

もうおわかりだろうが、三人は親子だった。今三人は何かから逃げるように敷地内の目的の場所に向かって走っていた。後ろからは怒声、悲鳴、爆音等が聞こえてき、ただの火事でないことを物語っていた。

しばらくすると、三人は屋敷の隅にある小さな蔵の前にいた。

「よし！ついたぞ！今から封印を解く。少し待て」

そう言つて父親は蔵の扉に片手をかざすと目を閉じ、呪文を唱え始めた。母親と神羅は父親の言葉にうなずき、周りを警戒する。待っている間にも屋敷のあちこちで爆音がなり、風にのつて焦げたにおいと血のにおいが届き、神羅は仲間を助けに行けない歯がゆさに顔をしかめる。

「母上。やはり今からでも助けに行かせてください…！」

今も傷つき戦っている仲間の事を思うと神羅は気が気でなかった。

「…駄目です。あなたの気持ちはわかりますが、神宮寺家の次期当主としてあなたは何としてでも生き残らなければいけません」

「しかし…！」

母親の言葉に神羅は納得できなかった。何故なら神宮寺家で現在一番強いのは現当主であり神羅の父親である源蔵ではなく、次期当主の神羅であつたからだ。そのため仲間を助けに行きたい、助けることが必ずできるという考えを捨てることができなかった。

「お聞きなさい、神羅。あなたは確かに強い、ですが今行けば必ず死ぬことになります。それだけは全世界の未来の為に絶対に避けなければいけません」

「何故分かるのですか！？やってみなければ分かりません！」

「…真里菜様の託宣と聞いてもですか？」

「…！…！…！…！…！そんな…」

巫女真里菜。神宮寺家にいる巫女のなかでも特別な存在で、彼女

が今まで神から受けたお告げはずれたことがなかった。そして先日真里菜が神から告げられた内容は『近いうちにおこる襲撃で神羅が戦えば必ず死に、全世界は滅びの危機に瀕する』といった内容のものであった。神羅は自分が戦いに赴けば死ぬというお告げを受けたことに愕然とする。しかし、それでも神羅は仲間を助けに行きたかった。幼いころから一緒に育ってきたものばかりで共にいるんな経験をしすごしてきた仲なのだ。簡単に見殺しにできるはずがなかった。

「神羅。あなたの気持は分かっていると云ったでしょう。ちゃんと彼らを助ける方法はかんがえてあります。今は生きることを第一に考えなさい」

母親の由紀が神羅そして仲間たちの事を大切にしてくれている事はよく分かっていたので、助けに行けない事に歯がゆさを覚えているのは自分だけではないと分かり、神羅はうなづくことしかできなかった。

「空いたぞ！急げ！」

源蔵はそう言う中に入り二人もそれに続いた。石造りの蔵の中には窓は一切なく、普通なら暗闇に閉ざされているはずだが今は中の様子が見て取れた。その原因は中央の床にえがかれた円形の魔法陣が淡く光っているせいだ。

「長距離転移魔方陣……！」

蔵の中にこんなものがあることに神羅は驚いた。

「神羅。今からお前を異世界に送る。陣にのりなさい」

自分だけが転移魔方陣を使用する。その意味する所に気づき神羅は声が震えるのをかるうじて抑えながら尋ねる。

「…ち、父上と母上はどうするのですか？」

「私たちはここに残る」

「さっき言ったでしょう、皆を助ける方法を考えてみると。あなたを異世界に送った後私たちは加勢に向かいます」

時間をかけて説得するようなことはせず、二人ははっきりと言う。敵がいつここに来るかも分からない為だ。本音を言えば愛する息子と別れるのだから優しく言葉をかけ見送りたいが、神羅の命がかかっている為そんな素振りは一切見せなかった。

しかし、神羅は動かなかった。二人の気持は察しがついていたがそれでも自分だけが助かり皆を見殺しにするという事に納得がいかなかった。行けば死ぬ、それを避けるために源蔵と由紀、おそらくは仲間も皆知って戦ってくれている。けれどもやっぱり自分だけが助かるのは間違っているのではないか、皆が助かる方法があるのではないかと考えどうするべきか悩んでいた時、近くで爆発音が鳴り響き蔵が揺れた。

「もう見つかったか。神羅！」

源蔵は神羅の背後に素早くまわりこみ陣に向かって突き飛ばす。そして陣にのつたのを確認すると由紀を見る。由紀はそれにうなずきで答え二人は陣に向かって片手を伸ばして向け詠唱を開始する。すると陣が輝きだす。

「父上！母上！」

神羅は皆を助けに行きたいという思いが強かったため、陣から出ようとする。しかし、陣の輝きが増すと同時に不可視の壁ができていて出ることができない。神羅は自分も戦い皆を助けたいと目で訴えながら、拳を握り見えない壁を何回も叩く。

しかし、二人は詠唱をやめない。そして徐々に輝きは増していきまぶしさに目を細めないといけないうらいになった時、詠唱を中断し源蔵と由紀は言った。

「神羅、今からお前を送る異世界は私たちは行った事のない場所だ。苦勞するだろうが、神宮寺家の使命を決して忘れるな。……元気でな」

「…元気でね、愛していますよ神羅」

もう二度と会うことはできないと感じていたため、二人は再開の言葉は口にしなかった。そして詠唱を再開すると、もうほとんど詠唱は完成していたのだろう、陣の輝きがさらに増し周りに濃密な魔力があふれ出す。神羅は別れがすぐそこに迫っているのを感じさらに激しく壁を叩く。そして…

「父上…！母上…！」

そう神羅が言うのと同時に光と魔力そして神羅が一瞬で消え、蔵の中には元通り淡く輝く陣と、悲しい瞳をたたえた源蔵、頬に一筋の涙を流す由紀だけが残された。



## 第一話（前書き）

物語を書くという事がこれほど難しいとは思いませんでした。  
悪戦苦闘の日々です。

## 第一話

「父上…！母上…！」

そう叫んだすぐ後に転移魔方陣が強く輝き、先ほどまでいた蔵の中から気づけば一瞬で神羅は深い森の中にいた。周りには背の高い草がおおい茂り、木はどれも高さが10メートル以上で見たところ太陽らしきものが昇っているのに木々にさえぎられ森の中は薄暗かった。

「みんな……」

実の親と家族同然の仲間を置き去りにし、自分だけが助かった事実に神羅は茫然とした。まだ皆が死んだと決まったわけでもなくまた会える可能性はゼロではないのだが、その一方でもう誰も生きてはいないという漠然とした予感があつた為神羅は不安な気持ちを取り除くことができずしばらくの間森の中で立ち尽くしていた。

どれくらい立ち尽くしていただろうか、不意に神羅は森の奥から草木をかき分けこちらに向かってくる物音に気付きそちらに気を配る。

「距離にして200メートルぐらいか…」

神宮司《じんぐうじ》家の一員として神羅はいろんな異世界を渡り歩いてきた。普段過ごしている世界と違う世界では何が起こるか分からない。それ故周りの異変に気付き気配を察知する能力は尋常

ではないくらい鍛えてあった。普段の神羅なら自分を中心として半径1キロメートル内に異変があれば、何があっても気づいていた。それがこんなに近づかれていたことに神羅は自分がどれだけ落ち込んでいたか知りわずかに動揺する。しかしそれも一瞬のことですぐに警戒し臨戦態勢をとり始める。

次第に音が近づいてきて気配の正体が姿を現す。

「魔獣…」

草木をかき分け神羅の前に姿を現したのは、体長5メートルはあろうかという白い虎の姿をした獣だった。虎と大きく異なる点として大きさもそうだが、まず背中にそれぞれの大きさが2メートルはあるつかという蝙蝠の羽のようなものがあるという点。そしてもうひとつが尻尾が蛇だという点だ。

「合キメラ成獣みたいだな」

そうつぶやきながら神羅は油断なく魔獣と相対する。魔獣は神羅を値踏みするかのようにしばらく一定の距離を保って歩きまわっていたが、やがて自分より下だと判断したのか唸うなりり声をあげると口を大きく開け神羅に飛びかかってきた。

それを神羅は最小限の動きで避けると通り過ぎた魔獣と再び向かい合う。

「殺せつしやう生は嫌いなんだけど、戦うしかないか…」

そう言うやいなや神羅は一瞬で、魔獣にとってはいきなり消えたかのように感じる速さで、魔獣の隣に移動し首のあたりに向かって手刀をくりだした。あまりの鋭さに魔獣の首はしばらく何後も無かったかのようについたままだったが、次第にすり落ちていき血がふ

きだす。

相手の命が完全に尽きたのを確認し、神羅は警戒をゆるめる。

「落ち込んでばかりいてもしょうがない…。これからどうするか考えよう」

魔獣の襲撃が一つのきつかけとなったのだろう。神羅はこのまま落ち込み続けても何にもならないと気付き、これからどうするか考える。

「とりあえず衣食住をなんとかして、あとはこの世界の調査かな」

と言ったものの神羅はそれほど衣食住に関しては心配していなかった。幼いころより様々な技術をたたきこまれてきたが、その中にサバイバルに関するものももちろんあった。しかも実際にそれらの技術を使い他の異世界で過ごしたこともある。それ故に、もちろん油断大敵だが、衣食住に関しては何とかする自信が神羅にはあった。問題なのはこの世界に関する情報不足のほうである。どういった種族が住んでいて、どんな思想をもっているのか？文明のレベルはどうなのか？どれぐらいいるのか？など他にも生きていくために確認すべき事柄が山ほどある。神羅はこの世界の調査をとりあえずの最優先事項と決めた。

「生きて絶対にまたみんなと会っんだ…」

その決意を胸に秘め神羅は森を抜けるべく歩きだす…。

## 第二話（前書き）

お気に入り登録して下さった方ありがとうございます。  
未熟な文ですが、これからもよろしく願います。

## 第二話

とりあえず歩き出したものの、どの方向に行くのが一番森を抜けるのに早いのか一見しただけでは判断がつかなかった。高い木々のせいで視線を上げても見渡すこともできないし、進んでいる方向を見ても薄暗いせいで10メートルほど先までしか何があるか分からなかった。このまま闇雲に進んでいてもしょうがないと思った神羅は立ち止まり悩み始めた。

「うーん、どうしようかな。一応森を抜けるすべはあるんだけど…」

確かに神羅はこの状況を打破するすべをいくつか持っていた。例えば、迷うのは森の中にいるからであって鳥のように森を見下ろす位置にいてどうすることができれば迷うことなどないだろう。そして神羅は空を飛ぶ事が出来た。魔法という力を使って。なら何故そうしないかというと、この世界の事が何も分かっていなかったからである。何らかの技術（魔法も含める）をもって空を飛ぶことが不自然でない世界ならいいが、そうでない場合見つかって大騒ぎになる可能性もある。もちろん気配を察知するのが得意な神羅なので見つかるということはあまり考えられないのだが、可能性はゼロではない。そのため空を飛ぶことに関しては使うのをためらっていたし、他の方法もほとんど魔法を使うものだったので、情報が集まるまではなるべく使いたくなかったのだ。

「…もう少し歩いてみよう」

そう決め再び歩き出そうとした時

「きゃああー！」

神羅の左斜め前の方向から悲鳴が聞こえてきた。距離にすると1キロメートル以上離れていたので常人ならば聞こえるはずがないのだが、神羅の耳にははっきりとそれが聞こえた。

悲鳴が聞こえた瞬間神羅はどうするか迷うことなく駆け出した。

周りの景色が流れるように後ろに消えていき、普通の人には認識することも出来ない速さで、1キロ以上あった距離を神羅はものの数秒で縮めていた。そして悲鳴が上がった場所の近くまで来た時その光景が目に入ってきた。

森の中にできた開けた場所に、一人の人間の少女とゴリラのような体長3メートルほどの獣がいた。少女は戦ってはいたのだろうが獣の攻撃をもらったようで今は木に背をあずけて座り込んでいたが、まだ戦う意思はあるようで手にしていた剣を獣の方に油断なくむけていた。しかし少女の方は頭からも血を流し反撃することもままならない状態でこれ以上獣に攻撃されると死んでしまうであろうことは明白だった。

神羅はゴリラのような獣を倒すことを決めるとスピードを殺すことなくそのまま少女と獣の間に割り込んだ。

「……」

いきなり目の前に人が現れ驚きで少女の目が見開く。神羅は少女の驚きを背中を感じながら目の前の獣に向かって一歩踏み出す。その動きはとても自然で獣は少しも反応することができず気づけば懷に侵入を許していた。そのまま獣が何が起こったのか気づく暇を与えず神羅は獣の腹に掌底を<sup>ていし</sup> 凄まじい速さで はなつた。

そのあまりの威力に一瞬で獣は意識を失い、木々をなぎ倒しながら10メートルほど吹き飛んだところで地に倒れた。

あまりの出来事に少女は空いた口がふさがらず、飛ばされた獣の方から目が離せなかった。神羅はその様子を見て少しやりすぎたかと それでもものすごく手加減していたが 苦笑いをうかべながら少女に向かって手をさしのべた。

「大丈夫？」

意識の外にあった少年から話しかけられ少女は驚きに一瞬驚きに身をすくめるが、すぐに気を取り直し怪訝な顔をしながら神羅に向かって言葉を返してきた。

「#\$%&\*@？」

それは聞いたことのない言葉だった。もちろんここは異世界なのだから言葉が通じるはずもないのだが、神羅はその事をすっかり忘れていた。差し出した手を元に戻しすぐに異世界にわたった時にいつも使う翻訳の魔法を自分につけ、もう一度少女に向かって言う。

「ええと、今度こそ僕の言葉は通じてる？ 怪我はない？」

少女は本日三度目となる驚きの顔をし

「な、なんだ、ちゃんと『マレル語』話せるんじゃない。聞いた事のない言葉だったから少し驚いたわ。それはともかく助けてくれてありがとう。怪我は大したことないわ」

そう言って立ち上がり少女はほほ笑んだ。神羅はそれを見て一瞬胸が高鳴る。あらためて少女をよく見るととても整った顔をしている。亜麻色の髪をポニーテールにし、力強さを感じさせる瞳は髪と同



じ色で鼻はすらりと細長く、唇は綺麗なさくら色。身長は神羅より少し低いぐらいなので170センチに届くかどうかといったところだろうか。グラマーではないがスレンダーな体をしており、それがまた顔とあいまってとても似合っていた。年は神羅と同じ15くらいに見える。そんな風に神羅が考えていると、

「私の名前はエリシア・オルコット。あなたは？」

「僕は神宮寺神羅」

神羅の名前を聞いたエリシアは首をかしげ、

「ジングウ・ジシンラ？…変わった名前ね」

「いや、ジングウジ・シンラだよ。呼びにくかったらシンラでいいよ」

「ごめんなさい、珍しいなまえだったから。シンラね。もう間違えないわ。あらためてよろしくね」

「よろしく」

エリシアは名前を間違えてしまったことに申し訳なさそうな顔をしていたが、神羅は気にしていないと暗に伝える為に笑顔でそう答えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6905z/>

---

守り手の戦い

2011年12月25日21時45分発行